

現代江蘇省吳方言と中古中国語 との声調比較

佐 藤 昭

§1. はじめに

本稿は、古代中国語の声調（より正確には「調類」、以下も大体同じ）と、現代の江蘇省および上海市の吳方言¹⁾の声調とを比較し、その対応関係を調べて、この方言における声調（調類）変化の跡を窺い知ろうというものである。

ここに言う古代中国語とは、今日、大部分の中国語諸方言の共通の祖先と考えられている「中古中国語」のことで、それは『切韻』（601 年）ないし『広韻』（1008 年）に代表される音韻の体系であり、時代で言えば、隋・唐間の中国語である。

現代吳方言の音韻資料としては、江蘇省和上海市方言調査指導組編『江蘇省和上海市方言概況』（南京：江蘇人民出版社，1960 年）²⁾を使用した。同書の第二部分は「字音対照表」となっていて、ここには全部で 2601 個の単字と、江蘇省および上海市の 20 地点の方言音がおさめられている。

同書の第一部分「江蘇省和上海市方言的分區」によると、同地域の方言は、第一区から第四区まで四つの方言区に分類されるが、このうちの第二区、即ち、方言点で示すと、蘇州・無錫・常熟・常州・海門・上海市・嘉定・松江の 8 方言が吳方言区に該当する。本稿で取扱うのは、この 8 方言についてである³⁾。

ところで、吳方言と言えば、中国における最も代表的な方言の一つである。これに関する研究も近年では少なくないが、その中でも特に重要なのは、趙元任の『現代吳語的研究』（清華学校研究院叢書第四種，北京，1928 年）であろう。そこでは、江蘇省・浙江省の 33 地点の方言音が音声記号によってきわめて精密に表記され、また中古中国語ないし現代北京語との音韻比較も行われて、この方言の特色を明らかにしている。

ところが、趙元任『現代吳語的研究』によって知られる音韻事象と、上

記『方言概況』（以下、『概況』と略称する）の「字音対照表」の漢字から得られた音韻事象との間には、必ずしも一致しない部分も存在するのである。この不一致については種々の理由があるであろうが、やはり、主としては、両者における調査時点の差に基づくものであらうと考えられる。『現代呉語的研究』の調査時点（1927年）⁴⁾と『概況』の調査時点（1956年～1958年）⁵⁾との間には、約30年の隔たりがあるのである。

§2. 江蘇省呉方言の声調と声母

§2.1. 江蘇省呉方言の声調数

江蘇省呉方言で区別される声調の種類としては、7種か8種というところが多い。『概況』11頁～13頁によれば、江蘇省第二区の28方言で行われる声調数は、次のような分布になっている⁶⁾。

- a) 8声調を有するもの：12地点
啓東 海門 崇明 浦東 松江 奉賢 常熟 無錫 宜興 吳江
金壇 溧陽
- b) 7声調を有するもの：11地点
常州 江陰 靖江 蘇州 昆山 太倉 川沙 南匯 青浦 金山
上海県
- c) 6声調を有するもの：4地点
嘉定 宝山 高淳 丹陽（口語）
- d) 5声調を有するもの：1地点
上海市

このうち8声調を有する12方言の場合、歴史的には、古代中国語の4声調がそれぞれ分裂を起して8声調になった（いわゆる「陰陽調分裂」）、その段階の状態を反映するものであると考えられる。もっとも、古代の8声調が内容的にそのままそっくり、この12方言の8声調に対応しているというわけではない。

また、7声調、6声調、5声調を有する方言の場合も、元来はいずれも8声調をもつものであったかもしれないが、その後、ある一部の声調が互いに接近し（おそらく調値が近かったために）、合併した結果、声調数が減少したのだと考えられる。

§ 2.2. 江蘇省吳方言の声母——特に松江方言を中心に

ところで、吳方言は、現在なお、中古中国語の〈全濁声母〉(有声の破裂・破擦・摩擦音の頭子音)を保存する方言としてよく知られているが、いまその実際例として、松江方言の声母(音節の頭子音)の体系を見てみる。

松江方言では、ゼロ声母を含めて全部で 27 の声母が区別される(『概況』122 頁)。この 27 声母は、下の表に示されるように、無声音のもの 15, 有声音のもの 12 と分類される。実は、このような有声・無声を基準にした声母の分類は、後述する声調の分類とも密接に関連するものとして重要なのである。

第1表 松江方言の声母

破裂音・破擦音			摩 擦 音	
無	声	有	無	有
p	p'	b m	f	v
t	t'	d n l		
ts	ts'		s	z
tʃ	tʃ'	dʒ ɳ	ʃ	
k	k'	g ɳ	h	ɦ
○				

なお、松江方言にはなくて、他の方言に存在するものとして、dz・ʒ がある。たとえば、常熟・常州・海門 では z の他に dz を有し、dz と z の区別を保っている。また、海門はさらに dʒ の他に ʒ をも有している。この他、無錫・常熟方言では捲舌音声母 (ʈʂ, ʈʂ', ʂ, ʐ) も用いられている。蘇州・上海市・嘉定三方言における声母の数とその種類は、松江方言の場合と全く同様である。

§ 2.3. 松江方言の声調

前述のように、松江方言は 8 声調を有する方言の一つである。この 8 声調は、それぞれ陰平、陽平、陰上、陽上、陰去、陽去、陰入、陽入とよばれるが、これらの声調の調値をいわゆる「五度制」によって表わすと、次の第2表のようになる。

第2表 松江方言の声調調値

調 類	陰 平	陽 平	陰 上	陽 上	陰 去	陽 去	陰 入	陽 入
調 値	53	31	44	22	35	13	5	3

さて、上の調値表からも知られるように、いま高さのちがいを別とすれば、声調の形態としては、陰平・陽平はともに下降型（くだり音調）、陰上・陽上はともに平板型（たいら音調）、陰去・陽去はともに上昇型（のぼり音調）、陰入・陽入はともに短促の平板型（音節末に声門閉鎖音 [-ʔ] を伴う）という区別になっている。

しかしながら、こんどは音域の特徴という点に関してしてみると、大別して、陰の系列の声調は高い音域に属し、陽の系列の声調は低い音域に属すというような体系になっていて、両者の間には、きわめて明瞭な、そしてひじょうに均斉のとれた対立が認められるのである。なお、このような、陰調 = 高い、陽調 = 低い、という声調対立は、松江方言特有の現象というわけではなく、これほど均斉のとれたものでないにしても、他の方言においても大体一致して認められるものである。

§ 2.4. 陰陽両声調と声母との結合関係

次には、声母と声調との結合の関係についてである。前にも見たように、松江方言には有声音声母、特に、有声の破裂音・破擦音・摩擦音が豊富に存在するが、この声母が無声であるか有声であるかということと声調との間には、密接な相互関係が存在するのである。

つまり、声調には前述のように陰の系列と陽の系列の二通りがあるのであるが、大体のところ、声母が無声のものは陰の声調をとり、声母が有声のものは陽の声調をとる、という組合わせになっているのである。たとえば、

{ 波 pu 53	{ 底 ti 44
{ 婆 bu 31	{ 弟 di 22
{ 固 ku 35	{ 郭 kɔʔ 5
{ 互 ɲu 13	{ 岳 ɲɔʔ 3

この無声声母 = 陰調（即ち、高い調子）、有声声母 = 陽調（即ち、低

い調子) という結合の規則性はきわめて顕著なものである。ただ、有声音のなかでも $m \cdot n \cdot l \cdot \eta$ などを声母とするものに、陰調、特に陰上・陰平と結合する例がよく見受けられるが、全体としては、やはり上に示した結合関係に従うのが主流である。

以上に見てきた音韻現象もまた、程度の差はあっても、他の江蘇省吳方言の特徴と共通するものである。

§ 3. 古代声調との対応関係からみた現代江蘇省吳方言の特色

§ 3.1. 古代声調との比較対応

一般論として、古代においては、中国語の声調は、〈平〉〈上〉〈去〉〈入〉

第3表 古今の声調比較

中古 声調 方言	平		上			去		入		声 調 数
	清	濁	清	次濁	全濁	清	濁	清	濁	
蘇 州	陰平	陽平	上 (陰上)	陽去 陰平	陽去	陰去	陽去	陰入	陽入	7
無 錫	陰平	陽平	陰上	陽上 陽去		陰去	陽去	陰入	陽入	8
常 熟	陰平	陽平	陰上	陽上 陽去		陰去	陽去	陰入	陽入	8
常 州	陰平	陽平	上 (陰上)	陽去		陰去	陽去	陰入	陽入	7
海 門	陰平	陽平	陰上	陽上 陽去		陰去	陽去	陰入	陽入	8
上 海 市	平 (陰平)	陽去	陰去	陽去		陰去	陽去	陰入	陽入	5
嘉 定	陰平	陽平	陰去	陽去		陰去	陽去	陰入	陽入	6
松 江	陰平	陽平	陰上	陽上 陽去		陰去	陽去	陰入	陽入	8

とよばれる四声であったが、これらはその後、音節の頭子音が〈清〉（無声音）であるか〈濁〉（有声音）であるかを条件にして、それぞれ二つに分裂した。これを「陰陽調分裂」という。つまり、古代の4声調は8声調に変化したわけであるが、その場合、頭子音が〈清〉の系列の声調には〈陰〉を用い（「陰平」「陰上」というように）、頭子音が〈濁〉の系列の声調には〈陽〉を用いる（「陽平」「陽上」というように）。

さて、ここで先ず古代中国語の声調と江蘇省吳方言の声調とを、ごく概略的に比較してみよう。その比較の表が前頁の第3表である。表の中の、蘇州・常州方言の「上」（上声）、上海市方言の「平」（平声）という名称は『概況』に拠ったものである。しかし、これらは厳密にはそれぞれ「陰上」「陰平」と称すべきものである。そこで本稿では、以下、他方言との比較の便宜を考慮して、厳密なほうの言いかたを用いることにする。

§ 3.2. 声調体系の簡單化——上海市・嘉定方言の場合

第3表の方言中、声調数の最も少いのが、上海市方言の5声調である。この方言では、陰調陽調両方面で大幅な声調の合併が起った。即ち、陰調のほうでは上・去声が、陽調のほうでは平・上・去の三声調が、それぞれ合流して一声調になっている。これに次ぐのが嘉定方言の6声調で、ここでは、陰・陽両調において、上・去声がそれぞれ平行的に合流している。要するに、両方言に共通していることは、陰・陽が同じ系列のものどうしで合流が行われたということである。

ところで、上海市方言について言えば、このような大幅な声調合併の現象は、実際には、このわずか100年あまりの間に起ったものだということである。胡明揚氏は、その論文「上海話一百年来的若干変化」（『中国語文』1978年第3期）において、この100年間を三期に分け、次のような順序で、上海市方言の声調が減少していったと説明している。

a) 第一期（十九世紀五十年代から二十世紀二十年代まで）では8声調が区別された。これらの声調の名称と調値は、陰平（53）、陽平（13）、陰上（44）、陽上（113）、陰去（35）、陽去（14）、陰入（45）、陽入（12）⁷¹。

(b) 第二期（二十世紀二十年代から五十年代以前）は7つか8つの声調があった。しかし、四十年代には6声調か5声調になった⁸¹。

c) 第三期（二十世紀五十年代から六十年代まで）では5声調が主流に

なっている。陰上と陰去が合併し、陽調の平・上・去声は一つになった⁸⁾。

以上は、胡明揚氏に拠って示した声調減少の進行過程である。ところで、上海市方言で陽上が陽去に移る際、全濁・次濁がそろって行動を起したかという点、そうではなく、実際は別々に、即ち、全濁のほうが一步先んじて陽去に変化したもののようである。胡明揚氏が Joseph Edkins の説明として引用するところによれば、“陽上調声母只有 l, m, ŋ, n, ɿ 和清濁零声母。原属陽上的塞音和擦音声母正处于向陽去轉化的過程中”⁹⁾。ということである（胡明揚氏前掲論文）。第一期において、陽上のうち全濁声母のものは、すでに陽去に合流し始めていたことが知られる。

なお、袁家驊等『漢語方言概要』（北京：文字改革出版社 1960 年）での報告によれば、上海の青年以下のものは 5 声調しかもたず、また、中には、陰平さえも陰上・陰去と区別されないで、4 声調しかもたない青年もいるという（同書 65 頁～66 頁による）。上海市方言の声調が、5 声調から 4 声調に向かう趨勢にあるということは、胡明揚氏によっても指摘されている（同氏前掲論文）。

§ 3.3. 古代濁音上声と江蘇省吳方言の声調

次に、古代の濁音上声と江蘇省吳方言の声調との対応関係について、やや詳しく見てみる。

前掲の第 3 表からも知られるように、古代四声調のうち、平声・去声・入声および清音上声のグループは、対応関係が比較的整然としていて、古今の間にあまり大きな変動がないのに対し、濁音上声の場合は、わりあい複雑な様相を見せており、これにどの声調が対応するかは方言によっても異なるし、また声母が「全濁」か「次濁」かによっても異なっている。そこで、以下その具体的状況を、「全濁」と「次濁」とにわけて見ていくことにする。

(1) 全濁上声について

古代の全濁音字は、江蘇省吳方言ではすべて、有声の破裂音・破擦音・摩擦音といった頭子音をもっており、従って、その声調は当然陽調である。さて、その中の上声字が、江蘇省吳方言でどういう状態になっているかという点、

a) 全部陽去になるもの（蘇州・常州・上海市・嘉定の各方言）

b) 陽上・陽去の二声調にわたるもの(無錫・常熟・海門・松江の各方言)の二つの派がある。このうち、a) については特に問題はない。なぜなら、古代全濁上声>陽去という変化のしかたが全面的、規則的であり、例外も少いからである。

これに対し、b) の場合、古代の全濁上声は、陽上によまれるものもあれば、陽去によまれるものもあるというような状態で、一見すると、二つの声調にまたがって変化をしたかのような様相を呈している。

そこで、『概況』の「字音対照表」中に含まれる全濁上声字 97 字¹⁰⁾について、陽上によむものと陽去によむものの数を、方言ごとに表示してみる。

第4表 全濁上声における声調対応

声調	方言	無 錫	常 熟	海 門	松 江
	陽 上	35	55	32	38
	陽 去	50	33	58	48

(この他に、陽平によまれるものが散発的に見られる)

上表から知られることは、常熟方言では陽上のほうが多いのに対し、他の3方言では陽去のほうが多いということである。しかし、多いとは言っても、それは比較的にということであって、かならずしも圧倒的な多さではない。従って、このうちのどちらが規則的だとは、にわかには言いがたいのである。また同一の漢字が、ある方言では陽上によまれるが、別のある方言では陽去によまれる(またはその逆)という例がたいへん多くて、結局、なにを条件にして陽上・陽去にわかれるのかは、明確ではない¹¹⁾。

ところで、以上のような声調対応の混乱現象が生じた原因についてであるが、江蘇省呉方言の中には、すでに全濁上声>陽去という声調変化を完結させているところもあるわけであるから、あるいはそういう方言の影響によるものとも考えられる。

しかしながら、一方、次のような推測も可能であるかもしれない。浙江省金華方言では、古代の全濁上声字について、しばしば二種の声調が併存している。一つは陽上であり、一つは陽去であって、その区別は、前者が口語音で後者が文語音ということであるが¹²⁾、そこで、あるいはこれと同じような二種の声調の区別が、無錫などの方言においてもかつて行われて

いたのではないかと考えるわけである。もしそうであったとするならば、これらの方言では、その後そのような声調の区別がしだいに失われていき、そして、あるものは口語音のほうの声調がのこり、あるものは文語音のほうの声調がのこった、その結果、陽上・陽去がこのような不規則な、混然とした状態を呈しているのだとも解釈しうるであろう。

(2) 次濁上声について

古代の次濁音とは、鼻音 (*m-, *n-, *ŋ-, *ɲ- など)、側面音 (*l-) および「喻母」(*j-) を含むものである。これら次濁音が現代の江蘇省吳方言でどのような頭子音になっているかという点、大体次のような三通りの現われかたをしている。

a) 鼻音・側面音をもつもの。たとえば、

[m-] 馬米母畝買美每卯秒某滿免勉猛敏網

[n-] 你努奶惱惱暖

[ŋ-] 耳女語扭仰染紐軟

[ɲ-] 瓦我五咬藕偶眼

[l-] 礼李里裏理鯉魯櫓瀟呂旅累老了柳覽懶卵兩冷嶺嶺攏臉

b) 有声摩擦音をもつもの¹³⁾。たとえば、

[z-] 惹乳蕊擾壤忍

[ʃ-] 野雨偉葦畐有友演遠引養痒

[v-] 舞武尾

c) 頭子音がゼロ、即ち、母音で始まる形になっているもの。たとえば、

[○-] 雅也已以五伍午晚挽允往勇永

さて、以上の a), b), c) それぞれのグループの漢字が陰・陽どちらの声調に属するかという点、a) のグループは、あるものは陰調に、あるものは陽調に、というように、陰調・陽調両方にまたがって帰属している。しかし、数の上では陽調になるもののほうがずっと多い。b) のグループは、その頭子音の性格からして、当然陽調にはいるものである。また、c) のグループは、頭子音ゼロという性格からして、当然陰調である。このようなわけで、結局、次濁上声字は江蘇省吳方言では、陽調になるものと陰調になるものとの二種類があることが知られるのである。

そこで、次に、『概況』の「字音対照表」中に含まれる次濁上声字 96 字について、それらがそれぞれの方言においてどの声調でどれだけの現われ

かたをするかを、下に表示してみる¹⁴⁾。便宜上、声調が陽調系列のものと陰調系列のものとで、表を別にした。また、a) の鼻音・側面音についても、陽調所属のもの〔I〕、陰調所属のもの〔II〕というようにわけた。

第5表 次濁上声における声調対応（陽調系列）

声母	方言 声調	無 錫	常 熟	海 門	松 江
鼻 音・側 面 音 〔I〕	陽 上	42	43	34	35
	陽 去	14	6	17	10
有 声 摩 擦 音	陽 上	12	15	15	11
	陽 去	10	8	7	11

（陽平によまれるものもごく少数存在する）

まず同じ陽調系列の声調をとるものとして、先の第4表と上の第5表とを比較してみる。第4表では、常熟方言を除くと、他は大体陽上より陽去が多いという傾向になっているが、第5表では、事情が一変して、陽上となるもののほうが圧倒的に多い。特に常熟方言などでは、鼻音・側面音で陽去となるのはむしろ散発的である。全体的にみて、海門・松江方言で、次濁に比較的陽去が多いのは、次濁上声>陽去の変化を完了させている他の方言（たとえば、上海市・嘉定など）の影響によるものとも思われる。

ところで、一方では、陽上・陽去を区別しない（両者を合流させた）方言があり、また一方では、声調の区別があまり明瞭でない（特に陽調系列においてそれが顕著）¹⁵⁾ という呉語方言一般の傾向があるなかで、次濁上声において陽上が陽去を圧倒して主流をなしている、という方言があることは注目されてよいと思われる。

次に第6表を掲げる。即ち、次頁の表である。

次濁上声字中、陰平に属するもので、特に代表的な例を次に示してみる。陰平のものには特に下線を付し、また陽声調所属のものは（ ）に括った。

	蘇州	無錫	常熟	海門	上海	嘉定	松江
你	<u>陰平</u>	(陽上)	<u>陰平</u>	<u>陰平</u>	<u>陰平</u>	陰去	陰上
母	<u>陰平</u>	陰平	<u>陰平</u>	陰上	陰去	陰去	陰上
魯	<u>陰平</u>	陰平	陰上	陰上	(陽去)	陰去	(陽平)

每	陰上	陰平	陰上	陰平	陰平	陰去	陰上
扭	陰上	(陽上)	陰平	(陽上)	陰平	陰去	陰上
碾	陰平	(陽上)	陰上	(陽上)	陰平	陰平	陰平
敏	陰平	{ 陰平 (陽上)	陰上	陰上	(陽去)	陰去	陰上
仰	陰上	陰平	陰上	陰平	陰去	陰去	陰上
也	陰平	陰平	陰平	陰平	(陽去)	陰平	(陽上) (陽去)
已	陰平	陰平	陰上	陰上	陰平	陰去	陰去
以	陰平	陰平	陰平	陰平	陰平	陰去	陰去
五(文語)	陰平	陰平	陰上	(陽上)	陰平	陰平	陰上

第6表 次濁上声における声調対応 (陰調系列)

方言		蘇州	無錫	常熟	海門	上海	嘉定	松江
鼻音・側面音 [II]	陰平	7	8	3	4	4	2	2
	陰上	11	0	15	7			15
	陰去	0	0	0	2	5	17	1
ゼロ声母	陰平	7	6	2	3	4	4	0
	陰上	8	4	12	7			9
	陰去	0	3	0	4	5	9	2

ところで、趙元任『現代吳語的研究』によれば、次濁上声字で陰平・陰上によまれるのは文語音であり、そしてこの種の現象は、江蘇省にはよくみられるが、浙江省にはみられないものだという (78 頁)。

しかしながら、同じ文語音といっても、陰平によまれるものと陰上 (方言によっては陰去) によまれるものとは、いささか来源が異なるのではないかと考えられるのである。江蘇省吳方言の中で、常州方言と他の7方言とは、前者が次濁上声>陰上となり、後者が次濁上声>陽上もしくは陽去になる、という点でおおいに異なる。つまり、次濁上声の変化に関しては、常州方言は官話系方言と同類なのである。また地理的にも、同方言は官話方言区に臨接している。江蘇省吳方言で、次濁上声字中陰上・陰

去によまれるものは、常州方言（『現代呉語的研究』によれば、丹陽・靖江・江陰の方言もこれと同類）ないし官話系方言の影響によるものではないかと考えられる。

これに対し、陰平によまれるものは、次濁上声>陰平と変化した方言が同一方言区ないしその周辺にあって、おそらくそこから入ってきたものではないかと思われる。江蘇省でいえば、高淳方言が次濁上声>陰平という変化を起した方言である（『概況』12頁）。また客家方言では、次濁上声は大部分陰平によまれるという（『漢語方言概要』166頁）。この点で、あるいは江蘇省呉方言と客家方言との間になんらかの関係が考えられるかもしれない。

以上、江蘇省呉方言と古代中国語との、声調方面での比較対応を行ってきたが、まだ十分に述べつくされていない部分もある。特に陰調方面における比較などがそうである。これらの問題については、今後の研究考察に期したい。

〔註〕

- 1) 以下、江蘇省呉方言という名称を用い、この中に上海市方言を包括させることとする。
- 2) のちに、采華書林（名古屋）より影印本が出版された。本稿はこれに拠っている。
- 3) 以下江蘇省呉方言と称する場合は、原則として、この8方言に関して言うものとする。
- 4) Yuen Ren Chao: *My Fieldwork on the Chinese Dialect, Computational Analyses of Asian and African Languages No. 2*, 1975 による。同論文はのちに、*Aspects of Chinese Socio-linguistics, Essays by Yuen Ren Chao* (Stanford University Press, 1976) にも収められる。
- 5) 『概況』の「序」による。
- 6) 以下の分類は、単に声調数が同じかどうかを基準にただけであって、各声調の所属字や古代声調との対応のしかたまでもみな同じというわけではない。
- 7) 胡明揚氏は、この部分を、Joseph Edkins: *A Grammar of Colloquial Chinese, as Exhibited in the Shanghai Dialect*, 1853, Shanghai に拠っている。

なお、高本漢 (Karlgren) 著、趙元任・羅常培・李方桂訳『中国音韻学研究』（長沙商務印書館，1940，台湾商務印書館影印本，1962）の444頁，あるいは、羅常培『漢語音韻學導論』（1956，北京，本稿は，1965，香港太平書局本による）63頁の「古今調類分合異同表」では、上海方言は8声調を有する方言として記されている。

- 8) 第2期および第3期についての、胡明揚氏の依拠した資料は、趙元任『現代吳語的研究』, A. Bourgeois: *Grammaire du dialecte de Changhai*, 1941, および『江蘇省和上海市方言概況』である。
- 9) 原文は中国の簡体字を使用しているが、本稿では、便宜上、日本通用の字体に改めた。
- 10) 同一漢字に二種の声調が備わっている場合は、それぞれを別にして数えた。なお、この97字の中には、頭子音が無声音になっていて、そのために陰調に属するものがいくつかある。それは、次の8字である。輔 (f-), 鍛 (t-), 緩 (○-), 很 (h-), 仗 (ts-), 挺 (t'-), 艇 (t'-), 蟹 (h-).
- 11) 全濁上声における、このような対応の混乱、動揺の現象に関連するものとして、趙元任による次のような指摘がある。
 “上声全濁在宜，溧，錫，……(途中省略) 是陽上，在其餘的變陽去。但有一層要注意的是全濁字陽上陽去之分不是全跟古上去一樣的，大概有三分之一的字剛剛跟古上去相反，所以叫它做上叫它做去是看大多數的傾向，而且上述的各地對於某字屬上某字屬去也不一致的。”(『現代吳語的研究』78 頁)
- 12) 金華方言については、約齋「金華方音与北京語音的对照」(『方言与普通話集刊』第五本，北京：文字改革出版社，1958 所収)を参照。
- 13) 同一の漢字で、ある方言では有声摩擦音を現わし、ある方言ではゼロ声母を示すという例もある。たとえば、也 (fi-/○-), 伍 (fi-/○-), 演 (fi-/○-), 引 (fi-/○-), 晚 (fi-, v-/○-)。
- 14) 同一の漢字に二種のよみかたが存在している場合、たとえそれらの声調が同じ形であっても、それぞれを別にして数えた。
- 15) “声調的區別沒有官話清楚，陽平上去尤其易混。”(『現代吳語的研究』87 頁)
 “吳語調值一般不很明朗清晰，……陽平上去的分辨似乎更困難，……”(『漢語方言概要』65 頁)